PART 2

キラーアプリは光IP電話 視野に入った通信・放送融合

FTTHサービスは250万加入を超えた。今後さらに市場を拡大させるためには、誰もが理解できる分かりやすいサービスが必要だ。キャリア各社は「光IP電話」をあげている。将来は宅内までのギガサービスで、よりリアルに近い世界が実現される。

「ブロードバンドサービスは今後、コンテンツ戦略が重要になる」――ソフトバンクBBの孫正義社長はこう語る。パート1で述べたように、FTTHキャリア各社は、エリアの整備と拡販体制の充実を図り、積極攻勢に打って出た。しかし、市場を大きく拡大させるには、ブロードバンド初心者をいかにして取り込むかがポイントになる。そのためには、高速化だけでなく、提供するコンテンツの中身が問われることになる。

05年度は光IP電話に注力

東京電力・光ネットワーク・カンパニーの田代哲彦ジェネラルマネージャーは、「ポイントは分かりやすさ。そういう意味で、一番最初のキラーアプリケーションは0AB～J番号による光IP電話だろう」と話す。他のキャリアも同意見で、2005年度に注力するコンテンツとして真っ先にあげている。

光IP電話は、KDDIの「光プラス電話」を皮切りに、03年から集合住宅向けサービスとして各社から提供されていた。

大きく動き出したのは、04年9月にケイ・オプティコムが戸建て住宅向けの「eo光電話」を投入してからだ。同社はeoホームファイバーとセットで、ADSL＋加入電話の料金よりも安価な月額5200円の料金設定とした。これがユーザーに受け入れられ、それまで加入者獲得に苦戦していた同社は飛躍的に数を伸ばし始めた。

KDDI・ブロードバンド・コンシューマ事業企画本部プロダクト統括部ブロードバンドサービスグループの圓谷道成リーダーは、「電話がキラーアプリケーションになるという当社の読みは間違っていなかった」と語る。同社は今年1月、戸建て住宅向けの「光プラスホーム」を開始したが、050番号への通話が可能になるオプションを付けるなど、光プラス電話のメニューを強化した。

東京電力はパワードコム・グループのフュージョン・コミュニケーションズのプラットフォームを利用し、同グループのISPであるDTIを通じて光IP電話を提供中だ。田代GMは、「現在、他の主要プロバイダーにも提案中で、近い将来には採用される見込みだ」と説明。050サービスを提供中の中部電力も「光IP電話の提供が最優先課題だ」（ひかりネット・カンパニー営業推進グループの舩坂宏樹グループ長）と表明している。

また、BBフォンで国内のIP電話サービスの先陣を切ったソフトバンクBBも、今春から「BBフォン光」の提供を開始している。

そしてついに、NTT東西も戸建て住宅向けの「ひかり電話」を発表。NTT東は2月1日から、NTT西は5月下旬からサービスを開始した。「Bフレッツ（光プレミアム）＋ひかり電話」の申し込み受付に、早くも手応えを感じているという。

あるキャリアの担当者は「NTTは自ら、Bフレッツユーザーに向けて“加入電話を解約できます”というメールを送っているようなので、われわれも気を引き締めてかかる」と警戒している。

光IP電話は、法人にも広がっている。

NTT東西はこれまで、大企業向けにサービスを提供してきたが、中小企業からの強いニーズに応えて「ひかり電話ビジネスタイプ」を発表。今春からBフレッツとセットで販売している。また、ケイ・オプティコムも中小企業をメインターゲットとした「eo光電話オフィス」を4月1日から販売している。

中小企業向けで先行しているのはUSEN。04年8月から「GATE 02 Phone」を提供している同社は、テレマーケティング用途も想定した2分4.2円メニューを用意し、他社との差別化を図っている。ブロードバンド法人企画部の後藤勉部長は、「フォーバルと共同で提供しているFTフォンを含め、約1万9000件を獲得しており、順調に推移している」と語っている。

今後も法人向けでは中小企業市場が主戦場となる。既存の0AB～J番号が使えることで、050番号の時は様子見だったユーザーが移行に踏み切る可能性は高い。通信機ディーラーにとっても大きなビジネスチャンスとなりそうだ。

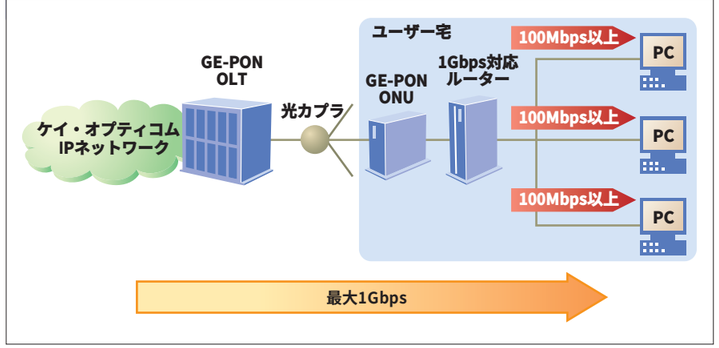
宅内まで1Gbpsへ

FTTHサービスは現在、1Gbpsアクセスライン共有型と100Mbps占有型の2形態で提供されているが、ユーザーが利用できる速度はともに最大100Mbpsだ。今後は宅内まで最大1Gbpsになる、本当の意味でのギガサービスが登場することになる。これはGE-PON技術を利用し、センター装置（OLT）だけでなく、ユーザー端末（ONU）も1Gに対応させることで実現される。

1Gbpsサービスに関しては、04年10月4日の「Yahoo! BB 光」発表会で

ソフトバンクBBは「光でテレビを変える」のコンセプトのもと、「Yahoo! BB光 TV package」を投入した

図　ケイ・オプティコムの1Gbps試験サービス



1Gbps FTTHサービス

サービスが先行すれば PC性能とコンテンツは追随してくる

ケイ・オプティコムは4月1日、世界で初めて宅内まで最大1Gbpsの試験サービスを開始した。神戸市須磨区の「eoホームファイバー」ユーザー100人を対象に6月15日まで実施し、今夏中には商用サービスを開始する予定だ。

同社はこれとは別にH.264技術を活用したハイビジョン映像の配信実験を行っているが、今回の実験では配信していない。通信サービス事業本部通信サービス計画グループサービス計画チームの堀田健一マネージャーは、「現在のPCには1Gbpsを活かすだけの能力がないから」と説明する。だが、近い将来、64ビットCPUを搭載したPCの登場が予定されており、この問題は解決される。

コンテンツの不在を指摘する声については、「100Mbpsの時も“卵が先か鶏が先か”という議論があったが、各社が提供を始めたらユーザーが望む世界が広がってきた。今度もキャリアがサービスを投入すれば、端末やコンテンツは追随してくる」という。

今回の試験サービスでは、速度の計測サイトが作られている。同社が運営する大阪梅田のopti c@fe（オプティ・カフェ）梅田店等で体験できるため、記者も触れてみた。

1Gと100Mの両方の環境で試せるようになっており、1Gで667Mbps、100Mで94Mbpsを計測した。映像コンテンツは、最新映画の予告編が2Mbpsで配信されていた。このため、映像では1Gと100Mでの差は感じなかったが、エンドスクロールの時の文字表示で100Mの方には違和感を感じた。今後、ハイビジョン映像の配信が可能になれば、一層差が出ることになるだろう。